

目の前の勤めに最善を

山形商工会議所議員
佐藤登美子氏



「この秋は雨か嵐か知らねども今日の勤めの田草とるなり」。二宮尊徳が遺した歌とされています。先の事は憂えず目の前の勤めに最善を尽くせという

教えであり、座右の銘でもあります。

それは30歳を目前にした私自身のけじめだったのかもしれませんが。結婚し高校の講師を辞めて山形市内の会計事務所に入り、税務のイロハを実践で学び数年経った時のことです。税理士試験を受けたところ5科目の1つ簿記論に合格しました。高校で簿記を教えていましたから、それほど難しくなかったのですが、そうなるも「どうしても残る4科目をクリアし税理士になりたい」という思いが募ってきました。しかし、所得税法、法人税法、相続税法、財務諸表論は働きながら合格できるほど甘いものではありません。事務所では大手顧客を担当していましたが、所長に「集中して勉強し挑戦してみたい、1年間休職させてください」とお願いしました。与えられた期間は1年。のんびり構えてはいられません。東京・日暮里に4畳半1間のアパートを借り根城とし、月曜から金曜日にかけて上京、水道橋の大原学園で学びまし

た。4科目すべてを受講したかったのですが、「一気に全部は時間的に無理」とアドバイスを受け、まず国税3法に取り組み、1年で合格しました。

残るは財務諸表論。日曜日ごとの講義コースを選択し、夜行バスで上野駅前に日曜の午前5時に着き日暮里のアパートで休息、水道橋の学校で受講し、その日の午後10時の東京駅八重洲口発のバスに乗って山形に戻りました。必死な思いが伝わったのか昭和57年12月に試験すべてをクリアし、税理士としての出発点に立つことができました。余裕のある学生生活ではありませんでした。日暮里のアパートは休息に立ち寄るだけ。経費節約のためガス、水道、電気を止めていました。でも、人気のある先生の夜間の講座に潜り込んで受講したり、若い学生さんたちと話をしたり…。遅まきながらの学生生活は楽しいものでした。実務経験のある私が先生に教えたりもしました。大原学園の山形市進出をニュースで知りましたが、学園の安部辰志理事長(高島町出身)は当時の先生で今も交流をさせていただいております。

昭和58年に山形市桜田に開業し、平成2年に深町、そして平成20年に現在の松栄に事務所を移転しました。15人のスタッフとともに、「お客様の繁栄は私たちの喜び」をモットーに税務・会計のお手伝いをしています。特に、これからの社会は医療、介護、農業などの分野が重要視されると考え、「医療経営支援」「介護福祉支援」「農業経営支援」の3本柱に「資産対策支援」を加え、スタッフ一同スキル向上を図っています。税務会計のエキスパートとして少しでもお役に立てる形で、社会貢献していかなければという思いからです。単に税務会計の観点からだけではなく、例えば大規模農家の経営視察に参加するなどしてそこで得た情報など紹介しています。

一方で山形市の監査委員を12年務めました。女性ということで話題となったようです。かつてドイツを訪れた時のことです。女性が親の介護などの理由で職場を去ることに厳しい視線が送られていました。「国税で大学教育まで受けたのに何事か。介護は専門の人に任せなさい」というわけです。結婚、子育て、介護のために、せっかく築いたキャリアを放棄しなければならない日本とは国情の違いといえ雲泥の差でした。幸い私は自ら望んだ職業を続けて来られましたが、この経験を活かし、微力ながら女性の活躍する場を広げたいと思っています。

(有)佐藤税務会計事務所代表取締役